

生活者

「個人誌を発行するということは、ぼくにとつて、長い間の夢であった。」野本三吉さんの個人誌『生活者』のまえがきにはこのように書かれている。後このように続く。

「本来なら、人は、ただ生きていけばよいのである。何も、自らの行動や心の動きなどを記録し、人に伝えることもない。ただ生ききってゆくこと、そのことが生の意味なのだと思う。しかし、ぼくのような凡人は、自らの行動を文字化するという作業の中で、もう一度、とらえ直してゆかないと、ズルズルと歴史の大きな流れの中にまきこまれてしまい、どこを向いて自分が生きているのかさえわからなくなってしまうのである。」

野本三吉さんは一九四一年生まれ。二六歳で小学校の教員を辞めて、日本列島を放浪し、三十歳で寿生活館職員（生活相談員）となる。引用したように、野本三吉さんは個人誌の発行をライフワークとした。小学校の教員を辞めて旅に出たときから日々の記録を取るようになったという。

同じところは「小学校の教員を辞めた」というところだけかもしれないし、野本三吉さんにだけ影響を受けているわけではないけれど、私も個人誌を書きたいと思う。当時、野本三吉さんは月に一度個人誌を様々な人に発送していたようだ。現実にかかわりあっている現場を越えて、異なった状況にある人たちから感想を聞いたり、その人の個人誌をもらったり、そんな経験を「貴重な体験」と振り返っている。「私も発行をして誰かに送りつけようか」そうも考えたけれど、切手を買

う習慣も私には無いし、手渡しをするにも、今のご時世コロナウイルスの影響で誰かに会いに行くのも気がひける。そういえば、ちょうどみらいつくり研究所のホームページが開設される。人と会えないなら、会えなくても集える方法を考えたいという思いもふつふつと湧いてきた。「ともにあること」を大切に思うからこそ、会えない時代に挑戦したい。まあ、ホームページのうちの一部分になったらそれでいいかな。そんな思いで筆をとりました。

野本三吉さんには到底及ばないだろうけれど、少しずつ始めていきたいと思えます。野本三吉さんは「生活者」の題字を森信三さんに書いてもらったようです。私は誰に書いてもらおうかな…。

こんなふわふわとした感じで、「みらいつくり個人誌」スタートです！